『THE夜もヒッパレ』の魅力

小高　良友

私は歌謡曲の大ファンであった、少なくとも大学院に入学するまでは。それまでテレビやラジオのベストテン番組は見逃さずにマークしてきたため、ヒット曲の動向はひじょうによくつかんでいた。ところが、大学院に入学すると同時に、それらをフォローする時間がなくなり、ヒット曲の動向がわからなくなり始めた。ほどなく、横文字が曲名にも歌手名にも横行し、グループが多数デビューするようになるとともに、私のヒット動向知識は全くの空白状態となってしまった。

『THE夜もヒッパレ』はときどきチャンネルを回しながら目にすることはあったが、ヒット曲を本人が歌わないベストテン番組などナンセンス以外の何物でもなく、ひじょうに手抜きでお粗末な感じがぬぐえず、全く見る気が起きなかった。

ところが、赤坂アナウンサーの声と姿にひかれ、一度長めにチャンネルを合わせたことがあった。そのときに、安室奈美恵がグローブの『Can't fall in love』を歌っているのを見て、この曲にひかれ、ＣＤを買って聴くようになったのをかわきりに、毎週この番組を見るようになり、ついに「はまる」にいたった。

この番組は、中部地区では土曜日の午後10時から約１時間ほど中京テレビで放送されていた。最終回は2002年の９月である。毎週この番組独自に選定したベストテン各曲が紹介され、最後のほうにはライブコーナーが設けられる。そのコーナーでは、その日の出演者の中から選抜されたものがその週のベストテンの曲には関係なくライブを披露する。私が夢中になって見ていた1997年当時のレギュラー陣は、三宅裕司、赤坂アナ、中山秀征、安室奈美恵、ＭＡＸ、マルシア、ビージフォーである。この他に毎回ベストテンにランクインされた曲を歌いに様々なゲストが登場する。もちろレギュラー陣もしばしばそれに参加する。各曲を歌う合間に三宅裕司を中心に出演者へのインタビューも行われる。

私がほぼ毎週欠かさず見ていた1997年からおよそ２年間という限定つきではあるが、以下［１］～［５］でこの番組の魅力の秘密を現在形で論じてみたい。

［１］総　論

かつて一世を風靡した歌番組の中に『ザ・ベストテン』がある。この番組の大きな魅力は、ベストテンのチャートに入った歌手たちを極力スタジオに生出演させ、出演できない場合には彼らの居場所まで追い駆けて多元中継をするという工夫をしていたことだ。つまり、本人が不在のときに本人のＶＴＲを流してその場を切り抜けるという姿勢を嫌い、この番組は生放送に徹したわけだ。この番組の視聴率が下がり始めた頃、ある友人が次のように語っていた。「最近の『ザ・ベストテン』はつまらないな。スタジオに来る歌手は３人ぐらいで、しらけてしまう」と彼は言うのだ。ちょうどこの頃はシンガーソングライター達によるいわゆるニュー・ミュージックの全盛

時代で、彼らの多くは１曲だけのためにテレビ出演することを嫌ったため、番組の出演者確保が困難になってきた。この点は、この番組を衰退させた主要因のひとつであろう。別の衰退要因として私が感じていたのは、ヒット曲のオリジナルを聴くことへの「飽き」である。ヒット曲は毎日テレビ・ラジオで何度も登場するため、この番組でその曲を聴いても初登場のときは新鮮な感じがあるが、２度、３度となると視聴者は飽きてしまうわけだ。

上記のふたつの問題点から『THE夜もヒッパレ』を見てみよう。この番組が上記の問題点を克服するその仕方にこそこの番組の魅力が隠されている。

ベストテン番組のむずかしさの一つは、出演者と前もって出演交渉ができない点であろう。ベストテンの動きは毎回変化するため、その動きに合わせて出演者を確保するのは至難の技である。ベストテンに入るような出演者たちはいわゆる『売れっ子』であるため、スケジュールは当然過密なはずであり、かなり先まで仕事が入ってしまっている。その中に新しい仕事を割り込ませるのは困難だ。したがって、スケジュールが空いていてもこの種の番組には出演したくないというミュージシャンは別としても、出演者の確保は一般に難しい。『THE夜もヒッパレ』は、発想の大転換をして、この点を見事に克服している。この番組は、ベストテンに入っている曲は本人が歌わないという姿勢を貫いている。たとえ本人が出演していてもそれは同じだ。『ザ・ベストテン』が抱えていた出演者確保難という問題に『THE夜もヒッパレ』はこのように対処した。かつての音楽番組の「常識」からすると、これは非常な冒険である。かつて私も何度かこの番組を見ようとしたことがあるが、本人が歌わないということで、何か「適当」で「手抜き」で「安っぽい」イメージがぬぐえず、すぐにチャンネルを替えてしまったものだ。

ところが、この番組は、前述した二つ目の問題点である「飽き」の克服を兼ねて一つ目の問題である出演者確保難の克服にチャレンジして、本人が歌わないという物足りなさを、他の人が歌うということから引き出される魅力でカバーしている。この点も『ザ・ベストテン』にはなかった新しさだ。しかも、この番組は他の人が歌うときに非常な工夫をしている。①現在の売れっ子たちを出演させる、②かつてのビッグヒットを持つ大スターたちを出演させる、③出演者を組み合わせて１曲を歌わせる、④海外の歌手を登場させて日本語で歌わせる、⑤無名だがハーモニーのきれいな実力派を出演させる、⑥歌手ではないが一定の歌唱力を持ち話題性のあるタレントを出演させる、⑦原曲にはないハーモニーをつけて原曲の更なる魅力を引き出す、という点がそれらだ。

［２］ 大スターたちのリサイクル活用

上記の総論の中でまず注目したいのは、「②かつてのビッグヒット曲を持つスターたちを出演させる」という手法だ。この手法は、ベストテン各曲を本人が歌わないという「ハンディ」を「魅力」に変えるためにこの番組が取り入れている手法のひとつだ。かつてのビッグヒット曲を持つスターたちとは、例えば、橋幸男、西郷輝彦、尾崎紀世彦、つのだひろ、尾藤いさお、キングトーンズ、もんたよしのり、庄野真代、サーカス、クリスタルキング、渡辺真知子などだ。彼らをこの番組に起用することにはいくつかの利点がある。

その１。彼らはテレビ出演の機会がかつてよりも少ないはずであるから、彼らにとってテレビ出演の機会はありがたいはずだ。テレビの音楽番組に出演すれば現在でも自分が健在であることを彼らは視聴者にアピールできる。この番組がスタートした当初はこのような起用方法は一抹のさびしさを伴ったかもしれないが、その後の出演者の様子を見ていると、もはや、この番組に出演することが彼らのステイタスの一部になっている様子が伺わ

れる。

その2。彼らのスケジュールは現在の売れっ子のスケジュールほどは過密ではないことが予想されるため、出演交渉もその意味で少しは容易であろう。また、彼らの歌唱力にはどのような曲でもこなせる玄人としての幅があるため、たとえ出演日がテレビ曲側の要請と違っていても、テレビ局側の計画はそれほどは狂わないかもしれない。

その3。ここ数年、1960年代から70年代にかけてのかつてのビッグヒット曲が注目されている。その中心人物たちを登場させることによって、この番組はかつて彼らのファンだった層をも取り込むことができる。しかも、そのような層は、私がそうであるように、現在の歌に戸惑っているかもしれないが、自分たちの時代のスターたちが現在の流行歌を歌ってくれれば、現在の歌に馴染めるばかりか、自分が時代遅れであるというコンプレックスをこの番組によって克服できるチャンスがあるのだ。そのような層がカラオケで現代の流行歌を歌えるのも夢ではなくなる。

その4。かつてのビッグヒット曲を持つスターたちには何といっても実力がある。現在のヒット曲を彼らに歌ってもらうことは、彼らの魅力の再認識になるばかりでなく、現在のヒット曲の多面的な魅力の引き出しにもなる。これは、『THE夜もヒッパレ』で自分のヒット曲を歌われる歌手たちにも大きな刺激になろう。

かつてのビッグヒット曲を持つスターたちの起用は、ひとことでいえば「リサイクル活用」と表現できようか。リサイクルは日本でも時代の要請であり動向でもある。リサイクル活用とはスターたちには失礼な表現であるが、『THE夜もヒッパレ』が生き続けていたのも時代のこの動向と無縁ではないと私は考えているため、あえてこの表現を使わせもらおう。

［3］ 歌手の組み合わせの妙

『THE夜もヒッパレ』は、出演者を巧みに組み合わせてベストテンの曲を歌わせ、現在ヒットしているベストテン各曲の持つ多様な魅力を引き出している。この手法も、ベストテン各曲を元々の歌手が歌わないという「ハンディ」を「魅力」に変身させるためにこの番組が取り入れている手法のひとつだ。もちろん、一人もしくは一グループでひとつの曲を歌う場合もあるが、多くは複数の歌手たちによって原曲が歌われる。

視聴者は、原曲をやや聴き飽きていても、この手法によりとても新鮮なイメージでその曲を受けとめられる。私の場合、原曲を知らずにこの番組を通して原曲を知り終には原曲のＣＤを買う、というパターンがとても多い。また、決してすくなくないパターンが、原曲よりもこの番組で聴いた曲のほうが気に入るというものだ。これは元々の歌手にとっては脅威であろう。例を出そう。つのだひろと錦織清がチャレンジした『Shake』（スマップ）、香田晋とアルベルト城間が組んで歌った『セロリ』（スマップ）、同じく香田晋とアルベルト城間による『Native Stranger』（氷室京介）などは、原曲よりはるかに私は好きだ。

この組み合わせ方も意表をつく場合が多い。新人と大ベテラン、演歌系歌手とラテン系歌手などがその一例だ。しかも、ぜいたくな組み合わせ方が希ではない。橋幸男と西郷輝彦を組んで歌わせたりしているのがその例だ。彼ら大スターたちは自分の持ち歌を全く歌うことなく、いわば後輩たちの歌を１曲歌うだけのために出演しているわけだ。毎回いろいろな組み合わせを登場させて多様な魅力を引き出そうとする番組スタッフの必死の努力の跡が伺われる。

［4］ 外国人歌手に日本語で歌わせる勇気

『THE夜もヒッパレ』では毎回のように外国人歌手が登場する。新人である場合もあればベテランの場合もあり、アメリカ・イギリスといった西欧ばかりかアジアからも歌手が招かれる。しかも、彼らはこの番組のベスト

テンの曲を「日本語」で歌うのだ。この手法も、ベストテンの曲を元々の歌手が歌わないという「ハンディ」を「魅力」に変身させるためにこの番組が取り入れている手法のひとつだ。

この点もかつての音楽番組になかった点ではないか。外国のアーチストを招いた場合、本人たちに自分の持ち歌を歌わせないなどということは全く考えられないことだった。この番組はかつてのそんな常識を破り、外国人歌手に持ち歌を歌わせないばかりか、「日本の」ヒット曲を「日本語で」歌わせるのだ。日本人にありがちな西欧コンプレックスをものともしないようなこの番組のこの姿勢には、従来の発想の転換とともに、一種の爽快感さえ感じられる。もっとも、大物外国人の場合には、「ライブ」コーナーに彼らを出演させて上記の「非常識」を埋め合わせる心配りがされている。

この手法によって歌われたベストテン各曲は、前述の[2]や[3]とはまた一味ちがった魅力を引き出されている。中でも特に圧巻だったのは、1997年4月にアメリカでデビューしたばかりの女性ボーカルグループのアルーアが1997年6月に出演して歌った『How to be a girl』(安室奈美恵)だ。これも原曲より私が好きな曲の一例だ。アルーアの彼女たちは、デビューまもなく来日して「宣伝」をかねての出演だったのであろうが、踊りの工夫・センスといい、ハーモニーといい、歌手生命をかけた凄みがあった。

[5] 実力主義

この番組に出演する日本人の歌手たちは、現在売れている歌手やかつてのビッグヒット曲を持っている歌手に限られない。他に、無名に近いが実力がある歌手たちにも登場の機会がある。

この番組ではベストテン各曲を本人が歌わないため、現在売れていようがいまいが、無名であろうが、現在のヒット曲をいかに魅力的に歌うかが勝負だ。その意味では、過去はどうあれ現在の自分の歌が勝負だ。いわば、全員が同じスタートラインにたって勝負をするわけだ。もちろん、かつて売れた歌手や現在売れている歌手にたいしては歌った後にそれなりのインタビューが用意されているが、ベストテンの曲を歌うということに関してはみんな平等だ。本人たちがいかにとりつくろうが、視聴者はこの番組で歌われる歌で出演者の実力判定を自然としてしまう。この番組では、いわば暗黙の実力主義が採用されているわけだ。この点も、ベストテン各曲を本人が歌わないという「ハンディ」を「魅力」に変える手法のひとつだ。

この番組を通じて知った無名歌手たちが何人もいる。しかも、彼らの歌を聴いて、原曲よりも優れていると思ったり、彼らの持ち歌を聴いたみたいと思った歌手が何人もいる。ゴスペラーズ、ＥＶＥ、アルベルト城間がその例だ。特に、ゴスペラーズが歌った『夢じゃない』(スピッツ)、アルベルト城間が歌った『Go the distance』(藤井フミヤ)、アルベルト城間が歌った『Nice boy』(シャ乱Ｑ)などは、原曲よりも彼らの歌のほうが私は気に入っている。

[6] 終わりに

最後に本稿の限界について触れておこう。この番組はかなりの長寿番組だったが、私が欠かさず見ていたのはそのうちの2年程度である。おそらくそれはこの番組の最も旬の時だったのではないかと思われるが、この番組が生まれたときから終了になるまでの変化について本稿は扱い得ていない。魅力について論じる以上、2002年9月でなぜ番組をうち切らざるを得なかったのかの点が大事になるが、本稿はそこまで射程を延ばせなかった。ただ、旬のときでも気になる点はあった。時々目を覆いたくなるような手抜きの場面にも出会うことがあったからだ。歌唱も踊りも中途半端で、何か素人カラオケ大会をイメー

ジしてしまうときがそれだ。これは番組の命取りになったろう。特に、歌手ではないが歌もへたではなく話題性のあるタレントたちを出演させたときにこの傾向が生じかねなかった。この点が番組終了と何らかの関係があったのかもしれない。

この番組は多くのスターたちを生み出した。私が知っている限りでは、スピードとＭＡＸ。この二つのグループは、私が見始めたときには、まだ売り出し中であったが、２年ほどの間にスター入りしてしまった。また、つい最近大ヒットしたゴスペラーズは、1997年当時はまだ無名の新人グループであった。アカペラブームを作った彼らにいち早く目をつけていたこの番組スタッフの先見性に私は脱帽である。